

思い出分析と理想分析を統合した 都市像と生活者像の描出手法の開発

石川 雄大¹・金 利昭²・山田 稔³・平田輝満⁴

¹正会員 上尾市役所 (〒362-8501 埼玉県上尾市本町3-1-1)

E-mail: a7874845@city.ageo.lg.jp

²正会員 茨城大学教授 工学部都市システム工学科 (〒316-8511 茨城県日立市中成沢町4-12-1)

E-mail: toshiaki.kin.prof@vc.ibaraki.ac.jp

³正会員 茨城大学教授 工学部都市システム工学科 (〒316-8511 茨城県日立市中成沢町4-12-1)

E-mail: minoru.yamada.civil@vc.ibaraki.ac.jp

⁴正会員 茨城大学准教授 工学部都市システム工学科 (〒316-8511 茨城県日立市中成沢町4-12-1)

E-mail: terumitsu.hirata.a@vc.ibaraki.ac.jp

本研究の目的は、思い出調査分析手法と理想調査分析手法を統合して都市像と生活者像を描出するための新たな調査分析手法を開発し、この手法を用いて若者の都市像と生活者像を描出することである。まず思い出と理想の関係及び過去と未来の時間関係に着目して既存調査票を改善し、事前のアンケート調査の後にワークショップを行う二段階調査プロセスを開発した。次に開発した調査分析手法を用いて学生20人を対象とした思い出・理想描出実験を実施し分析した結果、未来においては、自動運転車やヴァーチャルリアリティといった未来技術を志向するだけでなく、自宅や家庭においては同時に、自宅周辺の水辺のある道や自然公園で散歩するといった緑・水辺・自然を志向していること、配偶者と料理をするなど家庭・コミュニティに関わる人間の身体性を大切にすることを、具体的な事例として描出した。

Key Words :memory, ideal, urban space, lifestyle, future technology

1. 研究の背景

現在、日本の社会が大きな変革期にある。低炭素社会や高齢社会への適応、都市の集約化、観光立国、財源制約という社会の要請に応える都市の大改造を実行するためには、この大改造を支える分析・機能より強力な「理念・目標」が必要である。そのためには、個人の将来の都市像・生活者像が強く明確に描かれなければならない。しかしながら、これまでの住民のニーズの把握手法や目標設定手法は、現実の制約条件に強く拘束されるために、本源的ニーズと新技術を含めた将来ニーズを捉えることが困難であった。

また、都市計画法では都市計画マスタープランと呼ばれる「市町村の都市計画に関する基本的な方針」において、都市の基本方針を定める際には、あらかじめ住民の意見を反映させるための必要な措置を講ずることが定められている。そのため、全国の市町村での都市計画マスタープランの策定では、住民の意見を反映させるための

住民意識調査や住民参加型ワークショップなどが数多く行われている。

これまでの住民意識調査は、「現在住んでいる都市の状況にどれだけ満足しているか」、「都市における様々な要素が自身のまちづくりにとってどれだけ重要か」、「現在住んでいる都市の良いところは何処か」、「逆に足りないものは何か」などの単純な質問項目で把握されるものが多い。しかしこのような場合には、無意識のうちに現実の様々な制約を意識するため、住民の潜在的な都市へのニーズが抽出されない。その結果、望ましいまちづくりができていないことが想定される。

2. 研究の位置付けと目的

(1) 既存研究

これまで、住民ニーズを直接的に捉えるための手法は数多く提案されてきたが、これらの多くは身近で短期的な地区レベルまでの計画が対象であり長期的広域的課

題に適するものではない。後藤ら(1996)¹⁾は「まちづくり人生ゲーム」や「まちづくりオーラル・ヒストリー」という新しい手法を提案しているが、現実の様々な制約条件下での意識であるために本源的ニーズは捉えにくい。本源的ニーズに関しては、移動空間や自然、住宅、遊び空間、環境教育などに関する研究²⁾があるが、対象がそれぞれ独立した空間に限定されている。一方、原風景・心象風景・思い出・理想に関する研究³⁾では文学や心理学、建築・都市計画等の様々な分野で研究蓄積があるが、生活環境に関する具体的な知見には結びついていない。

(2) 筆者らのこれまでの取り組み

小沼ら⁴⁾は日常生活で利用する交通手段を対象として、子供から老人までの世代別にみた移動の意味を包括的に抽出し、「思索」「健康・運動」「気分転換」「自然体感」「発見・学習」「情報収集」「コミュニケーション」の7種類に分類している。

また、久保田ら⁵⁾は「思い出」を分析することで人間の生涯発達における生活環境要素(自然、植物、動物、人工物、人)の意味を網羅的に抽出し空間のあり方を考察している。

さらに、筆者らは住民のニーズを把握するために「現状ニーズ調査」, 「理想ニーズ調査」と呼ぶ新しい調査票を開発し、従来のニーズ調査との比較によりその有用性を確認してきた⁶⁾。

そして、理想の移動を分析することで移動手段・時間について有用な知見を得ている⁷⁾。

(3) 本研究の位置付け

これらの研究蓄積によって、思い出と理想のそれぞれがまちづくりに対し有用であることは既存研究から把握できており、「思い出分析」「理想分析」の調査分析手法としての可能性を確認することができた。しかし、理想の「移動」と「活動」と「空間」の関連性が捉えられておらず、「ライフスタイル」と「都市空間」の具体的な知見は導出できていない。

(4) 本研究の目的

そこで本研究は、過去からのアプローチである「思い出」から人間成長という制約から来る本源的ニーズを把握し、未来からのアプローチである「理想」から現実生活の制約を超える将来ニーズを把握することを目的とする。具体的には以下の2点である。

① 生活者の本源的ニーズを把握するための手法「思い出調査分析手法」と生活者の将来ニーズを把握するための手法「理想調査分析手法」を改良し、その2つを統合して都市像と生活者像を描出する手法を開発する。

② ①の開発した手法に基づいて実験を行い、理想の都市の生活者像(ライフスタイル)と都市像(都市空間)を描出する。

3. 調査分析手法の開発

(1) 開発方針

調査手法の開発方針として、本源的ニーズを把握する思い出分析と将来ニーズを把握する理想分析から今後の都市空間とライフスタイルの在り方を探り、かつ本源的ニーズと将来ニーズを併せ持った都市像と生活者像を描出することで、今後の都市計画において重要な一助となりうると考えた。

手法開発の流れとして、まず現時点でどの程度の実用性・関係性を導くことができるのかを把握するため、プレ実験として、アンケートを記述した後ワークショップで発言してもらい議論を深める一連の流れを行うこととした。その結果を踏まえて、アンケートの改良を行った後に本実験を行う。本実験の結果を分析した結果で明らかに言えそうな都市像と生活者像を描出していく。

(2) プレ実験

プレ実験では、既存の調査票として、「思い出分析」は久保田⁵⁾の調査票を、「理想分析」は板橋⁸⁾の調査票をそれぞれ参考にした。既存の久保田の調査票は「自然」「植物」「動物」「人工物」「人」の5つを生活環境要素としてそれぞれをアンケートで聞いていたが、本研究では「自然・植物・動物・風景・景色」, 「文化・思想・作品」, 「生活・暮らし・習慣」, 「移動」という4つに分類した。質問項目自体は従来のものと変更点はない。既存の板橋の調査票は変更をせずに既存のまま行った。対象は茨城大学の学生5人の1グループで行った。プレ実験の結果、「思い出分析」は比較的書きやすくアンケートに関しては修正を施す点は見受けられなかった。しかし、理想に関しての繋がりが希薄と感じたため、本研究に際しては理想的な面に絡める項目を調査票に加える必要があると捉えた。「理想分析」は被験者からアンケートが回答しづらいとの指摘を多く受けた。さらには、既存技術か未来技術かなどの技術レベルの幅の問題点も出てきた。したがって、全体的なアンケート・ワークショップの点から見ると大幅な改善をする必要があることがわかった。

(3) 調査分析手法の構築

プレ実験の想起してもらった結果から、「思い出」と「理想」というキーワードだけでなく、根本的な時間の流れである「過去」と「未来」においても軸を据えて構築していく必要があると判明した。このため、「過去」

表-1 本研究における各テーマで補えることができるものの対応表

	本 質	理 想	未 来
過去の思い出	◎	×	×
過去の理想	△	◎	×
未来の理想	×	◎	◎
未来の思い出	◎	○	◎

から「未来」という流れが想起する手順としてイメージしやすいものとした。これらの「思い出」、「理想」、「過去」、「未来」の関係性を本質的ニーズや将来ニーズに関して対応できないかを検討したところ、「過去の思い出」、「過去の理想」、「未来の理想」、「未来の思い出」が対応できることが可能ではないかと筆者は考えた。表-1 に本研究のテーマごとに補うことができる対応表を追加した。

「過去」を軸とした構成では、「過去の思い出」の必要性は変わらずに、新たに「過去の理想」という項目を付け加えた。「過去の思い出」に関しては、過去の思い出を書きつつってもらう従来の思い出調査手法と同じ形式であり、いつ、どこで、誰とといった項目も番号で選択してもらえよう形である。比較的、良い思い出が書かれることが想定される。「過去の理想」に関しては、「こういう思い出がほしかった」「こんな思い出があればもっと人生がよくなっていたかもしれない」など、あ

くまで時代背景に見合った上で可能性を考えてもらう。従来の理想調査手法と類似しており、比較的、好ましく思っていない思い出を良い思い出に変えるような回答がされると想定される。

「未来」を軸とした構成では、数年から数十年後の未来の世界として、「現在の技術の延長で将来的に実現できる可能性があるもの(人工知能・自動運転車や家事手伝いロボットが存在し、宅配にはドローンも使用される、様々な物がインターネットに接続される IoT, VR)」が存在し、「人間を対象とした時間、空間を超越するもの(タイムマシンや魔法のドア)」は存在しないものと予め設定した。その中で「未来の理想」と「未来の思い出」という項目を記述してもらう。「未来の理想」に関しては、未来での「都市」と「自分自身」の理想をそれぞれ描いてもらう。こちらは「過去の理想」とは違い制約条件がほとんどない。「未来の思い出」に関しては、これまでの「過去の思い出」、「過去の理想」、「未来の理想」を通して、未来で良い記憶だったと思える出来事やどのような経験が自分の人生に幸せを与えるかなどを思い浮かべてもらう。また、「過去の思い出」と同様のフォーマットで、いつ、どこで、誰とを番号でも選択してもらう形である。

以上を踏まえ、これまでの「思い出」と「理想」の関係性から、さらに発展させた、「思い出」・「理想」・「過去」・「未来」の関係性があるのではないかと仮定した。その中で役割を考えた結果、①「過去の思い出」、②「過去の理想」、③「未来の理想」、④「未来

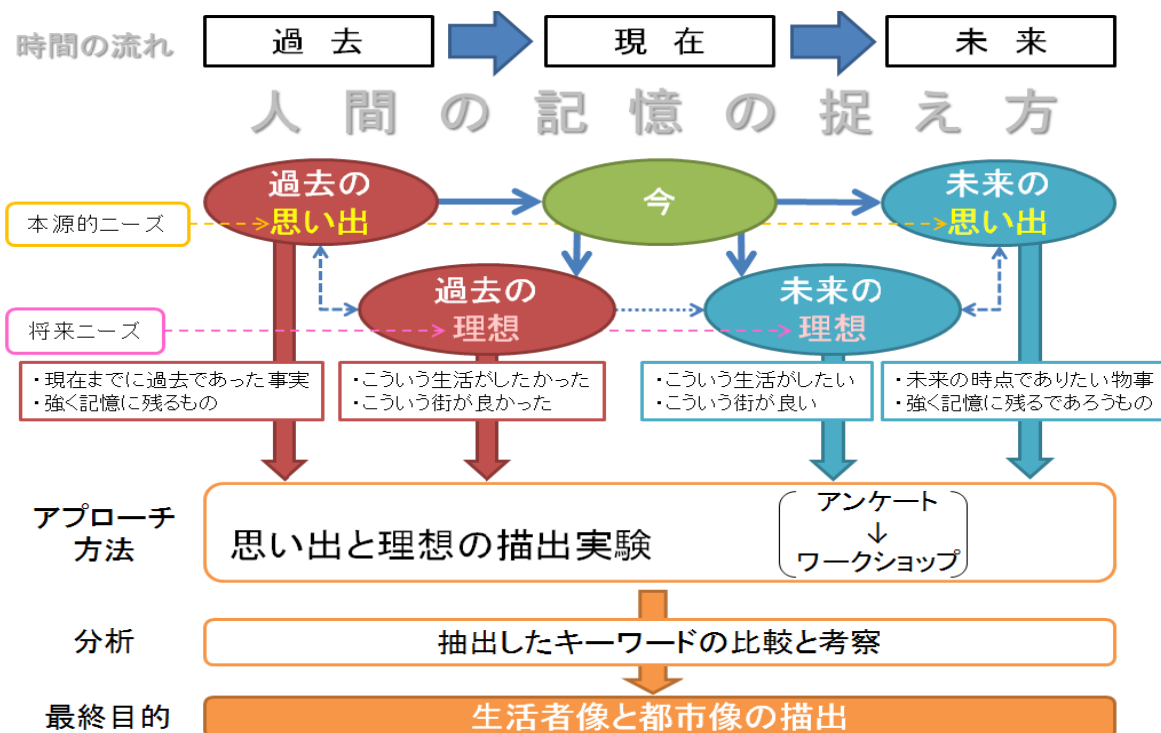


図-1 本研究の概念図

の思い出」の4つが妥当であると考えた。調査分析手法の一連の流れに関しても、自由記述のアンケートで個人の過去の思い出を想起し、現在の視点から過去と未来の理想を描いてもらい、未来の時点での思い出として想起したいものを頭に思い浮かべてもらう。その後、ワークショップをすることにより個人の思い出と理想をさらに深めることが本研究の調査分析手法として最適であると考えた(図-1)。

4. 思い出と理想の描出実験

「過去」・「未来」・「思い出」・「理想」というキーワードからアンケートの後にワークショップを行うものとして「思い出と理想の描出実験」を行うものとした。実験の詳細な内容に関して、表-2に示す。

ワークショップを行う日より前にアンケートを配布した。アンケートを配布する際には事前にアンケート項目について説明をして被験者に手渡した。ワークショップ当日は筆者がファシリテータ兼タイムキーパーの役となり、質問項目ごとに「自然・植物・動物・風景・景色」、「文化・思想・作品」、「生活・暮らし・習慣」、「移動」の4つの各要素でそれぞれの書いてきてもらったものについて一人ずつ指名して出してもらった。また、アンケート時に浮かばなかったものは、周りの人の発言で触発されて浮かんだら話してもらった。その後、議論時間を設けて話し合いをしてもらった。

表-2 思い出と理想の描出実験の概要

実験日時	10月下旬から11月中旬
被験者	茨城大学の学生20人(20~24歳) 5人×4グループ
実験場所	日立キャンパス S2棟4階ゼミ室
質問項目	① (過去の思い出) あなた自身の過去の思い出はどのようなものですか？ ② (過去の理想) あなたはどのような過去があれば理想だったと思いますか？ ③ (未来の理想) A. あなたの未来において、自分の住む街はどのようになっていますか？ B. あなたの未来において、自分のライフスタイルはどのようにしたいですか？ ④ (未来の思い出) 未来の生活の中で、どのような思い出に残ることをしたいですか？ (全回答自由記述)

5. 都市像と生活者像の分析と描出

描出実験から、それぞれのテーマから4要素ずつ分析を行ったが、ここでは代表的な結果のみを記載する。

「過去の思い出」、「過去の理想」、「未来の理想」、「未来の思い出」の4テーマについて、被験者Aの「自然・植物・動物・風景・景色」の関係図を図-2に被験者Bの「移動」の関係図を図-3に示す。

この関係図は4テーマの関連性を一目で見てわかるようにしたものである。それぞれの括弧内はワークショップで発言された内容を筆者が活動を中心に要約したものである。

「過去の思い出」では、被験者Aは海外旅行での非日常的な風景・景色的な思い出であり、特に湖とビルのコントラストが良い夜景が印象的で今後も訪れたいと発言している。被験者Bは高校時代の通学時の電車通学していたことをなぜか印象に残っていると発言している。

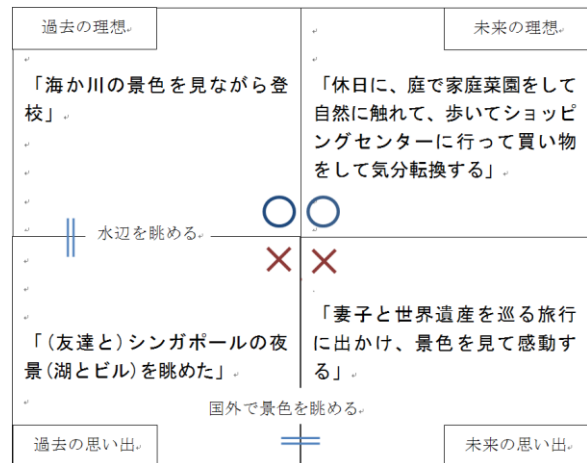


図-2 被験者Aの自然・植物・動物・風景・景色の4テーマの関係性

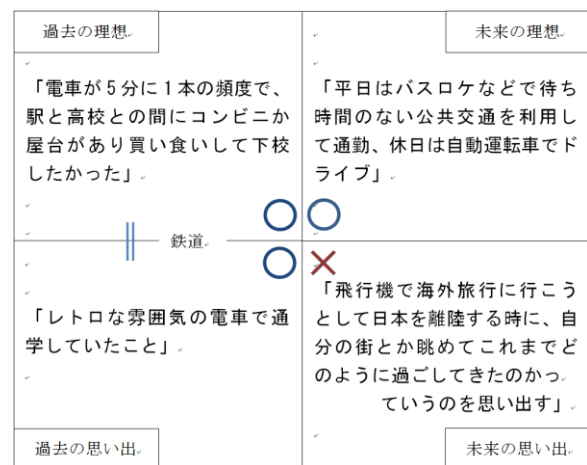


図-3 被験者Bの「移動」の4テーマの関係性
 ※「○」…共通点、「○」…日常的出来事
 「×」…非日常的出来事

「過去の理想」では、被験者 A は通学という日常的な行動の中で海か川の美しい景色を見ながら気分良く向かうというものである。またこちらはどちらも水辺を眺めることを意識しているということで「過去の思い出」と共通点がある。被験者 B は電車の頻度を多くしてそこからコンビニや屋台へ寄れるような通学をしたいというものである。またこちらはどちらも鉄道、高校時代の通学ということで「過去の思い出」と共通点がある。

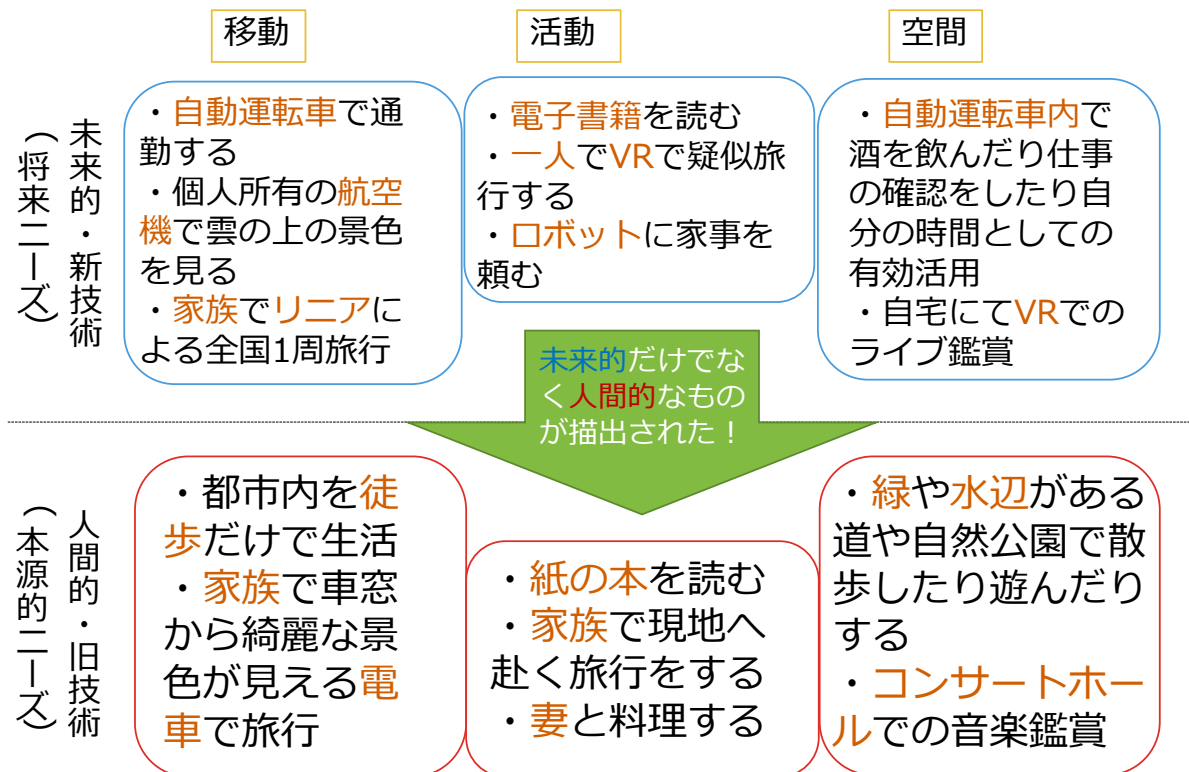
「未来の理想」では、被験者 A は一人で活動する日常的な理想であった。発言の中には「過去の理想」と同じ環境で川沿いをジョギングしたいとも発言している。また、職場は超高層ビルが立ち並んでいるが、住む空間に関しては自然があふれているような街が良いとしている。被験者 B は公共交通の推進と自動運転システムが発達した都市の中で平日ではバスロケーションシステムを活用した待ち時間の削減と公共交通の利用、休日では自動運転車でドライブをしたいと発言をしていた。

「未来の思い出」では、被験者 A からはワークショップ時の発言の一部を抜粋すると、「技術的にいくら便利になっても世界の景色は特色が残っていると考えており、日本で見るものと大きく異なるため非常に良い経験になる。子供には、多くの経験をしてもらいたいと思うので、自身の経験も交えて各地を回った。自分が小さい時にできなかった経験をしてもらおうことで子供の成

長に役立ててほしいなと思った」ということだった。「過去の思い出」にもあたる世界の風景をもう一度体験したいことに加え、子供にも同様の経験をさせたいとしていることから、自分以外の存在を直接的に意識するのがわかる。被験者 B からは仕事をやり終えた定年後に海外旅行に赴くために現在よりも安くなった飛行機に乗る、その際に自分の過ごした街を眺めてこれまでどのように過ごしてきたかを思い出すという発言がされた。

上記は一例であり、本実験から得られた具体的な「未来の理想」と「未来の思い出」から若者が抱く将来の希望として描出される都市像と生活者像について表3に示す。内容としては、「未来の理想」からは未来的・新技術(将来ニーズ)が主に挙げられた。自宅からある程度の距離があり時間にしておよそ 20 分の距離を自動運転車で通勤したり、VR(ヴァーチャルリアリティ)で音楽・ライブ鑑賞や疑似旅行をしたり、持ち運びで便利な電子書籍で本を読みたいなど挙げられていた。本源的ニーズに関するものは多くなく、自分以外の誰かの存在は圧倒的に少なかった。だが、「未来の思い出」となると人間的・旧技術(本源的ニーズ)が主に挙げられた。楽器演奏が行われるコンサートホールに足を運ぶ、家族で自宅にて料理や食事をする、緑や水辺がある道や自然公園を散歩したり遊んだりする、紙の本を読みたいなどといったことが挙げられた。

表-3 未来における都市像と生活者像の描出



6. 結論

本研究では、以下に示す知見が得られた。

- ① 将来の都市像と生活者像を求めるにあたって従来は、理想調査においては本源的なものが出てきづらい、思い出調査においては将来ニーズが掴めずにいた。本研究において「思い出」と「理想」に加え「過去」と「未来」の関係性に着目し、「思い出調査分析手法」と「理想調査分析手法」を統合して「過去の思い出」、「過去の理想」、「未来の理想」、「未来の思い出」というステップを踏んで、それらを個人のアンケートから複数人によるワークショップで引き出すことによって本源的ニーズと将来ニーズと包括して抽出することが可能である新たな調査分析手法を開発することができた。
- ② 開発した調査分析手法を用いて実験を行った結果、緑や水辺のある近所の道や自然公園で散歩や遊ぶといったことが多く求めていることや、配偶者と料理をしたり子供の大会の応援をしたり、家族団欒といった家庭に関わる出来事を多く未来で大切にしておきたい等が描出された。これらのことから、(1)紙の本や映画館といった旧時代のテクノロジーは未来でも残る。(2)家族で料理や散歩といった人間性・身体性がある。(3)日常圏では、通勤において自動運転車で移動時間を自分の時間として使いたいとし、非日常圏では、自動運転車に加え、旅行中の鉄道が多く想起されることがわかった。

謝辞：思い出理想アンケート及びワークショップにご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。また本研究は東京ガス株式会社との共同研究として進めたものであり、茨城事業部西川向一氏、日立支社耕田和幸氏には貴重なご意見をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 岡村竹史, 後藤春彦「住民参加型ワークショップによる総合的・体系的計画づくりへの試み-「まちづくり人生ゲーム」の提案と検証-」日本建築学会学術講演梗概集, pp. 11-12, 1996.
- 2) 仙田満「原風景による遊び空間の特性に関する研究-大人の記憶している遊び空間の調査研究」日本建築学会計画系論文集第 322 号, pp. 108-117, 1982.
- 3) 肥田野登, 細谷隆己, 村松和彦「祖父母との思い出空間に着目した多世代住宅に関する研究」日本建築学会計画系論文集第 517 号, pp. 115-122, 1999.
- 4) 金利昭, 小沼志乃武「世代別にみた日常生活における移動の意味に関する基礎的研究」第 31 回日本都市計画学会学術論文集, pp. 409-414, 1996.
- 5) 金利昭, 久保田明子「人間の生涯発達に着目した生活環境の新しい計画枠組みの提案-思い出分析を用いた意味的論アプローチ-」土木学会環境システム研究論文集, Vol.29, pp. 131-142, 2001.
- 6) 板橋風子, 金利昭「理想的な活動から住民の潜在的な都市へのニーズを抽出する試み」茨城大学工学部都市システム工学科卒業論文, 2012
- 7) 石川雄大, 梶山大貴, 金利昭「移動から見た理想の生活行動に関する研究」土木計画学研究・講演集, Vol.54, pp. 1463-1467, 2016.

(2018. 4. 27 受付)

DEVELOPMENT OF A METHOD OF DEPICTING URBAN IMAGES AND LIFESTYLE IMAGES BY INTEGRATING MEMORIAL ANALYSIS AND IDEAL ANALYSIS

Yudai ISHIKAWA, Toshiaki KIN, Minoru YAMADA and Terumitsu HIRATA